

『銀の匙』

お国さんのおとう様は骨格のたくましいこわい人で、お役のため留守がちだったが、たまに家のときはいちんち二階に閉じこもってなにか書きものをしていた。そうしてすこしやかましくするとじきにしかられるのでこちらもおとう様のいる日には遊びに行かなかったし、むこうも家に小さくなっていた。どうかしてそれを知らずにいつ

「お国さん、お遊びなさいな」

とよぶとお国さんは玄関の障子を細めにあげ親指を鼻のさきへだしてさもこわそうに手をふってみせる。

桃のお節句にお国さんのところへよばれたことがあった。日あたりのいいお座敷の正面に高くひな段をこしらえて立派なおひな様がかざってあった。家のは目にはいりそうな小さいのにお国さんのはその五つがけもある。おひな様は生きてるものとはかり思ってた私はからだかすくむよな気がしていくつもつづけざまにお辞儀をしたらみんながどっと笑った。そこへ意外にも留守だと思っただおとう様が出てきたのでどうなることかとおひな様とおとう様の顔を見くらべながら今にもべそをかきそうにちぢこまっていた。おとう様はおじてる私を見ていつになく笑いながら豆煎まめいりを紙に包んでくれて、年はいくつだの、名はなんというのといろんなことをきいた。そして「ここにいる人のなかでだれがいちばんこわい」

といったから正直におとう様を指さしたらみんながまたどっと笑った。おとう様も笑いながら

「おとなしくさえずればしかりはしない」

といて二階へいってしまったのでようやくやくほっと息をついた。